

# 漸化式を用いるベッセル関数 $J_\nu(x)$ の 数値計算法の別法の誤差解析

吉 田 年 雄†

第 1 種ベッセル関数  $J_\nu(x)$  について、漸化式を用いる数値計算法の別法について述べる。  $m$  を適当に選ばれた正の偶整数とし、  $\alpha$  を小さな任意定数とし、  $F_{\nu+m+1}(x) = 0$ ,  $F_{\nu+m}(x) = \alpha$  を出発値として、  $J_\nu(x)$  が満足する漸化式を繰り返し使うことにより、  $F_{\nu+m-1}(x)$ ,  $F_{\nu+m-2}(x)$ ,  $\dots$ ,  $F_\nu(x)$  を順次、計算する。そのとき、通常用いる  $\sum_{k=0}^{\infty} \epsilon_k^{(1)} J_{\nu+2k}(x) = 1$  の形のもの代わりに、  $\sum_{k=0}^{\infty} \epsilon_k^{(2)} J_{\nu+2k}(x) = \cos x$ , あるいは、  $\sum_{k=0}^{\infty} \epsilon_k^{(3)} J_{\nu+2k+1}(x) = \sin x$  を利用すれば、ある  $N (< m)$  に対して、  $n = 0, 1, \dots, N$  についての  $J_{\nu+n}(x)$  の通常の近似式  $J_{\nu+n}(x) \approx F_{\nu+n}(x) / \sum_{k=0}^{m/2} \epsilon_k^{(1)} F_{\nu+2k}(x)$  とは別の形の近似式  $J_{\nu+n}(x) \approx \cos x F_{\nu+n}(x) / \sum_{k=0}^{m/2} \epsilon_k^{(2)} F_{\nu+2k}(x)$ , あるいは、  $J_{\nu+n}(x) \approx \sin x F_{\nu+n}(x) / \sum_{k=0}^{m/2} \epsilon_k^{(3)} F_{\nu+2k+1}(x)$  が得られる。本論文では、これらの方法について誤差解析を行い、有用な誤差の評価式を与えている。

## Error Analysis of the Alternative Methods Using the Recurrence Technique for the Calculation of Bessel Functions $J_\nu(x)$

TOSHIO YOSHIDA†

We give the alternative methods for the calculation of Bessel functions  $J_\nu(x)$ . Let  $m$  be an appropriately chosen positive even integer and let  $\alpha$  be an arbitrarily chosen small constant. Starting with  $F_{\nu+m+1}(x) = 0$ ,  $F_{\nu+m}(x) = \alpha$  and by successive application of the recurrence relation for  $J_\nu(x)$ , we generate  $F_{\nu+m-1}(x)$ ,  $F_{\nu+m-2}(x)$ ,  $\dots$ ,  $F_\nu(x)$ . If we use  $\sum_{k=0}^{\infty} \epsilon_k^{(2)} J_{\nu+2k}(x) = \cos x$  or  $\sum_{k=0}^{\infty} \epsilon_k^{(3)} J_{\nu+2k+1}(x) = \sin x$ , we obtain the approximation  $J_{\nu+n}(x) \approx \cos x F_{\nu+n}(x) / \sum_{k=0}^{m/2} \epsilon_k^{(2)} F_{\nu+2k}(x)$  or  $J_{\nu+n}(x) \approx \sin x F_{\nu+n}(x) / \sum_{k=0}^{m/2} \epsilon_k^{(3)} F_{\nu+2k+1}(x)$ . This paper describes the error analysis of these approximations and useful estimates of the error.

### 1. はじめに

$\nu$  次 ( $\nu \geq 0$ ) の第 1 種ベッセル関数  $J_\nu(x)$  の数値計算には、漸化式を用いる方法がよく使われている。以下に、従来の方法について、簡単に説明するとともに、その別法を述べる。

$\nu$  の小数点以下の部分を改めて  $\nu$  と置くことにする。したがって、  $0 \leq \nu < 1$  である。

$m$  を適当に選ばれた正の偶整数とし、  $\alpha$  を小さな任意定数とする。

$F_{\nu+m+1}(x) = 0, F_{\nu+m}(x) = \alpha$  (1)  
を出発値として、  $J_\nu(x)$  が満足する漸化式

$$F_{\nu-1}(x) = \frac{2\nu}{x} F_\nu(x) - F_{\nu+1}(x) \tag{2}$$

を繰り返し使うことにより、  $F_{\nu+m-1}(x)$ ,  $F_{\nu+m-2}(x)$ ,  $\dots$ ,  $F_\nu(x)$  を順次、計算する。そのとき、

$$\sum_{k=0}^{\infty} \epsilon_k^{(1)} J_{\nu+2k}(x) = 1 \tag{3}$$

を利用すれば、ある  $N (< m)$  に対して、  $n = 0, 1, \dots, N$  についての  $J_{\nu+n}(x)$  の近似式

$$J_{\nu+n}(x) \approx F_{\nu+n}(x) / \sum_{k=0}^{m/2} \epsilon_k^{(1)} F_{\nu+2k}(x) \tag{4}$$

を得ることができる。ただし、

$$\epsilon_k^{(1)} = \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu} \frac{(\nu+2k)\Gamma(\nu+k)}{k!} \tag{5}$$

である。本論文では、この方法を、方法 I と呼ぶこと

† 中部大学経営情報学部経営情報学科  
College of Business Administration and Information  
Science, Chubu University

にする。これは、 $J_{\nu+n}(x)$  を計算する通常の方法であり、この方法の誤差解析は、すでに、二宮<sup>1)</sup> および吉田<sup>2)</sup> によって行われている。式 (3) の代わりに、関係式<sup>3)</sup>

$$\sum_{k=0}^{\infty} \varepsilon_k^{(2)} J_{\nu+2k}(x) = \cos x \tag{6}$$

あるいは、

$$\sum_{k=0}^{\infty} \varepsilon_k^{(3)} J_{\nu+2k+1}(x) = \sin x \tag{7}$$

を使うことも考えられ、それぞれに対応した近似式として、

$$J_{\nu+n}(x) \approx \cos x F_{\nu+n}(x) / \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} F_{\nu+2k}(x) \tag{8}$$

あるいは、

$$J_{\nu+n}(x) \approx \sin x F_{\nu+n}(x) / \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} F_{\nu+2k+1}(x) \tag{9}$$

が得られる。ただし、

$$\begin{aligned} \varepsilon_k^{(2)} &= \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu} \frac{(-1)^k 2^{\nu+2k} \Gamma(\nu+1) \Gamma(2\nu+2k)}{(2k)! \Gamma(2\nu+1)} \tag{10} \\ \varepsilon_k^{(3)} &= \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu} \frac{(-1)^k 2^{\nu+2k+1} \Gamma(\nu+1) \Gamma(2\nu+2k+1)}{(2k+1)! \Gamma(2\nu+1)} \tag{11} \end{aligned}$$

である。以後、前者を方法 II、後者を方法 III と呼ぶことにする。本論文では、まだ報告されていない方法 II と方法 III の誤差解析を行う。

### 2. 方法 II の誤差解析

関数  $J_{\nu+n}(x)$  および  $Y_{\nu+n}(x)$  はともに同じ漸化式 (2) を満足する。逆に式 (2) の一般解は

$$F_{\nu+n}(x) = \xi J_{\nu+n}(x) + \eta Y_{\nu+n}(x) \tag{12}$$

によって表される。ここで  $\xi$  および  $\eta$  は任意定数である。これらの任意定数は式 (1) によって決定される。式 (1) から次式が得られる。

$$F_{\nu+m+1}(x) = \xi J_{\nu+m+1}(x) + \eta Y_{\nu+m+1}(x) = 0 \tag{13}$$

$$F_{\nu+m}(x) = \xi J_{\nu+m}(x) + \eta Y_{\nu+m}(x) = \alpha \tag{14}$$

式 (12) と (13) から  $\eta$  を消去すると次式を得る。

$$F_{\nu+n}(x) = \xi \left( J_{\nu+n}(x) - \frac{J_{\nu+m+1}(x) Y_{\nu+n}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} \right) \tag{15}$$

式 (15) と関係式 (6) より

$$\begin{aligned} &\sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} \left( \frac{F_{\nu+2k}(x)}{\xi} + \frac{J_{\nu+m+1}(x) Y_{\nu+2k}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} \right) \\ &+ \sum_{k=m/2+1}^{\infty} \varepsilon_k^{(2)} J_{\nu+2k}(x) = \cos x \tag{16} \end{aligned}$$

が得られる。式 (15) と (16) から  $\xi$  を消去し、 $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  を

$$\begin{aligned} \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x) &= \frac{1}{\cos x} \left( \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} \frac{J_{\nu+m+1}(x) Y_{\nu+2k}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} \right. \\ &\left. + \sum_{k=m/2+1}^{\infty} \varepsilon_k^{(2)} J_{\nu+2k}(x) \right) \tag{17} \end{aligned}$$

と定義すると、次式が得られる。

$$\begin{aligned} J_{\nu+n}(x) &= \frac{\cos x F_{\nu+n}(x)}{m/2} (1 - \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)) \\ &\sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} F_{\nu+2k}(x) \\ &+ \frac{J_{\nu+m+1}(x) Y_{\nu+n}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} \tag{18} \end{aligned}$$

さらに、

$$\Theta_{\nu,m,n}(x) = \frac{J_{\nu+m+1}(x) Y_{\nu+n}(x)}{J_{\nu+n}(x) Y_{\nu+m+1}(x)} \tag{19}$$

と定義すれば、

$$\begin{aligned} J_{\nu+n}(x) &= \frac{\cos x F_{\nu+n}(x)}{m/2} (1 - \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)) \\ &\sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} F_{\nu+2k}(x) \\ &+ J_{\nu+n}(x) \Theta_{\nu,m,n}(x) \tag{18'} \end{aligned}$$

と表すこともできる。

したがって、式 (1) を出発値として、漸化式 (2) を繰り返し適用することより得られた  $F_{\nu+m-1}(x)$ ,  $F_{\nu+m-2}(x), \dots, F_{\nu}(x)$  を用いて、式 (8) により、10 進  $p$  桁の精度で  $J_{\nu+n}(x)$  が計算できるためには、

$$|\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)| < 0.5 \times 10^{-p} \tag{20}$$

および

$$|\Theta_{\nu,m,n}(x)| < 0.5 \times 10^{-p} \tag{21}$$

が成り立てばよい。

$J_{\nu+n}(x)$  の近似式 (8) の相対誤差  $E_{\nu,m,n}^{(2)}(x)$  は、式 (18) あるいは (18') より、

$$\begin{aligned} E_{\nu,m,n}^{(2)}(x) &= \frac{\frac{\cos x F_{\nu+n}(x)}{m/2} - J_{\nu+n}(x)}{J_{\nu+n}(x)} \\ &= \frac{\sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} F_{\nu+2k}(x)}{J_{\nu+n}(x)} \\ &= \frac{\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x) - \Theta_{\nu,m,n}(x)}{1 - \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)} \tag{22} \end{aligned}$$

と表され、さらに、 $|\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)| \ll 1$  のときには、

$$E_{\nu,m,n}^{(2)}(x) \approx \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x) - \Theta_{\nu,m,n}(x) \tag{23}$$

と表される。

2.1  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  の変形

式 (17) で表される  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  を変形しよう。式 (6) を用いれば、次式が得られる。

$$\begin{aligned} \Phi_{\nu,m}^{(2)} &= \frac{1}{\cos x} \left( \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} \frac{J_{\nu+m+1}(x)Y_{\nu+2k}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} \right. \\ &\quad \left. + \cos x - \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} J_{\nu+2k}(x) \right) \\ &= \left( \cos x Y_{\nu+m+1}(x) \right. \\ &\quad \left. + \frac{2}{\pi x} \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(2)} R_{m-2k,\nu+2k+1}(x) \right) \\ &\quad / \left( \cos x Y_{\nu+m+1}(x) \right) \end{aligned} \tag{24}$$

ただし、

$$\begin{aligned} R_{m-2k,\nu+2k+1}(x) &= \frac{\pi x}{2} \left( J_{\nu+m+1}(x)Y_{\nu+2k}(x) - J_{\nu+2k}(x)Y_{\nu+m+1}(x) \right) \\ &= \sum_{l=0}^{m/2-k} \frac{(-1)^l (m-2k-l)! \Gamma(\nu+m-l+1)}{l!(m-2k-2l)! \Gamma(\nu+2k+l+1)} \\ &\quad \cdot \left( \frac{x}{2} \right)^{-m+2k+2l} \end{aligned} \tag{25}$$

は Lommel 多項式<sup>4)</sup>である。

式 (24) の分子の第 1 項を書き換えよう。次式で表される  $\cos x J_\nu(x)$  のベキ級数展開 (付録 A 参照)

$$\begin{aligned} \cos x J_\nu(x) &= \sqrt{\pi} \left( \frac{x}{2} \right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left( \frac{x}{2} \right)^{2k} \\ &\quad \frac{\Gamma(\nu+2k+1/2)}{k! \Gamma(k+1/2) \Gamma(\nu+k+1) \Gamma(\nu+k+1/2)} \end{aligned} \tag{26}$$

を用いて変形すると、

$$\begin{aligned} \cos x Y_{\nu+m+1}(x) &= \left( \cos x J_{\nu+m+1}(x) \cos(\nu+m+1)\pi - \cos x J_{-\nu-m-1}(x) \right) \\ &\quad / \sin(\nu+m+1)\pi \\ &= \left\{ \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1)\pi \left( \frac{x}{2} \right)^{\nu+m+1} \right. \\ &\quad \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^k (x/2)^{2k} \Gamma(\nu+m+2k+3/2) \right) \\ &\quad \cdot \left( \frac{x}{2} \right)^{-\nu-m-1} \\ &\quad \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^k (x/2)^{2k} \Gamma(-\nu-m+2k-1/2) \right) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} &\quad \cdot \left. \left( \frac{x}{2} \right)^{\nu+m+1} \right\} \\ &\quad \cdot \left. \left( \frac{x}{2} \right)^{-\nu-m-1} \right\} \\ &= \left\{ \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1)\pi \left( \frac{x}{2} \right)^{\nu+m+1} \right. \\ &\quad \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^k (x/2)^{2k} \Gamma(\nu+m+2k+3/2) \right) \\ &\quad \cdot \left( \frac{x}{2} \right)^{-\nu-m-1} \\ &\quad \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^{k+m+1} (x/2)^{2k+2m+2} \right) \\ &\quad \cdot \Gamma(-\nu+m+2k+3/2) \\ &\quad \cdot \left. \left( (k+m+1)! \Gamma(k+m+3/2) \Gamma(-\nu+k+1) \right) \right\} \\ &\quad \cdot \left. \Gamma(-\nu+k+1/2) \right\} \\ &= \left\{ \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1)\pi \left( \frac{x}{2} \right)^{\nu+m+1} \right. \\ &\quad \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^k (x/2)^{2k} \Gamma(\nu+m+2k+3/2) \right) \\ &\quad \cdot \left( \frac{x}{2} \right)^{-\nu-m-1} \\ &\quad \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^{k+m+1} (x/2)^{2k+2m+2} \right) \\ &\quad \cdot \Gamma(-\nu+m+2k+3/2) \end{aligned}$$



$$\begin{aligned}
& \sum_{j=0}^{m/2} \left(\frac{x}{2}\right)^{2j} \frac{\Gamma(\nu+m-j+1)\Gamma(-\nu-m+2j-1/2)}{\Gamma(j+1)\Gamma(j+1/2)\Gamma(-\nu-m+j-1/2)} \\
= & \frac{1}{\sqrt{\pi}} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m-1} \\
& \cdot \sum_{j=0}^{m/2} \left(\frac{x}{2}\right)^{2j} \frac{(-1)^j \Gamma(\nu+m-j+1)\Gamma(\nu+m-j+3/2)}{j! \Gamma(j+1/2)\Gamma(\nu+m-2j+3/2)}
\end{aligned} \tag{30}$$

このように、式の簡単化のために、定理(29)が大きな役割を担っている。式(27)と(30)を式(24)の右辺に代入すると、その分子において、第1の部分(ベキ級数で展開したもの)の一部と第2の部分( $k=0, 1, \dots, m/2$ の項)が相殺し、次式を得る。

$$\begin{aligned}
\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x) &= \left[ \frac{-1}{\sqrt{\pi}} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m-1} \right. \\
& \cdot \sum_{k=m/2+1}^m \left( (-1)^k (x/2)^{2k} \Gamma(\nu+m-k+1) \right. \\
& \quad \cdot \Gamma(\nu+m-k+3/2) \\
& \quad \left. / (k! \Gamma(k+1/2) \Gamma(\nu+m-2k+3/2)) \right) \\
& + \left\{ \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1)\pi \left(\frac{x}{2}\right)^{\nu+m+1} \right. \\
& \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^k (x/2)^{2k} \Gamma(\nu+m+2k+3/2) \right) \\
& \quad / (k! \Gamma(k+1/2) \Gamma(\nu+m+k+2) \\
& \quad \cdot \Gamma(\nu+m+k+3/2)) \\
& - \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu+m+1} \\
& \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^{k+m+1} (x/2)^{2k} \Gamma(-\nu+m+2k+3/2) \right) \\
& \quad / ((m+k+1)! \Gamma(m+k+3/2) \Gamma(-\nu+k+1) \\
& \quad \cdot \Gamma(-\nu+k+1/2)) \left. \right\} \\
& / \left[ \sin(\nu+m+1)\pi \right] \\
& / \left( \cos x Y_{\nu+m+1}(x) \right)
\end{aligned} \tag{31}$$

上述した項の相殺により、 $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  が小さくなりうることに注意しよう。逆に、 $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  が小さくなるためには、式(24)の分子で項の相殺が起こらなければならないということである。

上式において、 $(\nu+m/2) \cdot m/2 \gg x/2$  ならば、[]の第1の部分の  $k=m/2+1$  の項が主要項である。したがって、 $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  に対する有用な評価式として、次式が得られる。

$$\begin{aligned}
\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x) & \approx \frac{(-1)^{m/2} \Gamma(\nu+m/2) \Gamma(\nu+m/2+1/2) (x/2)^{-\nu+1}}{\sqrt{\pi} \cos x Y_{\nu+m+1}(x) (m/2+1)! \Gamma(m/2+3/2) \Gamma(\nu-1/2)} \\
& = \frac{2(-1)^{m/2} \Gamma(2\nu+m)}{\sqrt{\pi} \cos x Y_{\nu+m+1}(x) (m+2)! \Gamma(\nu-1/2)} (2x)^{-\nu+1}
\end{aligned} \tag{32}$$

$\nu=1/2$  のときには、上の評価式は零となる。 $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  そのものは小さくなるが、零になるわけではない。式(31)において、[]の第1の部分( $k=m/2+1$  から  $m$  までの和の部分)は、 $m \geq 2$  ならば零になり、{}の部分だけが残る。したがって、この  $\nu=1/2$  の場合には、誤差は極端に小さくなる。

## 2.2 方法IIによる $J_{\nu+n}(x)$ の計算について

$J_{\nu+n}(x)$  の具体的な計算法については、文献1)に述べられたものと類似の方法を用いばよいので、詳しくは述べない。

$\nu \ll m$  および  $x/m$  が小さいとき、式(17)で与えられる  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  の絶対値は、固定された  $\nu$  および  $x$  に対して、 $m$  の単調減少関数であることが、評価式(32)から分かる(これは、 $x/m \ll 1$  ならば、あらい近似  $Y_{\nu+m+1}(x) \approx -\Gamma(\nu+m+1)(x/2)^{-\nu-m-1}/\pi$  により確かめられる)。さらに、式(19)で与えられる  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$  は、 $\nu+m+1 > x$  のときには、 $m$  の単調減少関数であることが、ベッセル関数の性質から容易に分かる。したがって、固定された  $\nu$  および  $x$  に対して、式(20)を満足する最小の  $m$  を  $M$  とし、 $|\Theta_{\nu,M,n}(x)| < 0.5 \times 10^{-p}$  を満足する非負の  $n$  が存在したとき、その最大値を  $N$  とすれば、 $0 \leq n \leq N$  に対して、式(8)により10進  $p$  桁の精度で  $J_{\nu+n}(x)$  が計算できることになる( $n > N$  に対しては、 $|\Theta_{\nu,m,n}(x)| < 0.5 \times 10^{-p}$  を満足するように、 $m$  の値を  $M$  より大きく選ぶ必要がある)。

表1の(a), (b), (c)には、 $J_{\nu+n}(x)$  の近似式(8)の値、その相対誤差、 $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  の値(式(18)の計算値)、その評価式(32)の値および  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$  の値(式(19)の計算値)の数値例として、 $x=10$  で、表中に記した  $\nu, n, m$  の場合の結果を示す。これらは、FUJITSUのM-1600の倍精度計算による結果である(以下同様)。式(32)が  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  の十分な評価式になっていることが分かる。 $n=0$  の場合には、 $\Theta_{\nu,m,n}(x)$  は  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  に比べて十分に小さいことが分かる。また(b)の場合は、式(8)の相対誤差は、 $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  ではなく、式(23)で評価しなければならないことが分かる。紙面の都合上、この一例しか示すことができないが、他の場合の結果もほぼ同様である。

表1の(d), (e), (f)には、 $x=10, n=0, m=20$

表1  $x = 10$  の場合の  $J_{\nu+n}(x)$  の近似式 (8) の相対誤差,  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  および  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$   
 Table 1 Relative error of approximation (8) to  $J_{\nu+n}(x)$ ,  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  and  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$   
 in the case of  $x = 10$ .

	(a) $\nu = 0.2$ $n = 0$ $m = 20$	(b) $\nu = 0.2$ $n = 16$ $m = 20$	(c) $\nu = 0.8$ $n = 0$ $m = 20$
Approximation (8)	$-2.16972896172 \cdot 10^{-1}$	$1.25676073845 \cdot 10^{-3}$	$-3.10849847378 \cdot 10^{-2}$
Relative error of (8)	$-1.56 \cdot 10^{-7}$	$-4.64 \cdot 10^{-6}$	$6.18 \cdot 10^{-7}$
$\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$	$-1.56 \cdot 10^{-7}$	$-1.56 \cdot 10^{-7}$	$6.18 \cdot 10^{-7}$
Estimate (32) of $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$	$-1.57 \cdot 10^{-7}$	$-1.57 \cdot 10^{-7}$	$6.20 \cdot 10^{-7}$
$\Theta_{\nu,m,n}(x)$	$1.67 \cdot 10^{-10}$	$4.48 \cdot 10^{-6}$	$4.25 \cdot 10^{-10}$

  

	(d) $\nu = 0.51$ $n = 0$ $m = 20$	(e) $\nu = 0.501$ $n = 0$ $m = 20$	(f) $\nu = 0.5$ $n = 0$ $m = 20$
Approximation (8)	$-1.34032208684 \cdot 10^{-1}$	$-1.36941908044 \cdot 10^{-1}$	$-1.37263735718 \cdot 10^{-1}$
Relative error of (8)	$1.11 \cdot 10^{-8}$	$8.44 \cdot 10^{-10}$	$-2.69 \cdot 10^{-10}$
$\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$	$1.13 \cdot 10^{-8}$	$1.03 \cdot 10^{-9}$	$-7.95 \cdot 10^{-11}$
Estimate (32) of $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$	$1.14 \cdot 10^{-8}$	$1.12 \cdot 10^{-9}$	0.0
$\Theta_{\nu,m,n}(x)$	$1.90 \cdot 10^{-10}$	$1.89 \cdot 10^{-10}$	$1.89 \cdot 10^{-10}$

表2  $x \approx \pi/2$  の場合の  $J_{\nu+n}(x)$  の近似式 (8) の相対誤差,  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  および  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$   
 Table 2 Relative error of approximation (8) to  $J_{\nu+n}(x)$ ,  $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  and  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$   
 in the case of  $x \approx \pi/2$ .

	(a) $x = 1.5$ $\nu = 0.2$ $n = 0$ $m = 10$	(b) $x = 1.571$ $\nu = 0.2$ $n = 0$ $m = 10$	(c) $x = 1.5707963$ $\nu = 0.2$ $n = 0$ $m = 10$
Approximation (8)	$6.04371510680 \cdot 10^{-1}$	$5.74371147341 \cdot 10^{-1}$	$5.73570459020 \cdot 10^{-1}$
Relative error of (8)	$-3.39 \cdot 10^{-10}$	$2.04 \cdot 10^{-7}$	$-1.55 \cdot 10^{-3}$
$\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$	$-3.39 \cdot 10^{-10}$	$-1.56 \cdot 10^{-7}$	$-1.55 \cdot 10^{-3}$
Estimate (32) of $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$	$-3.40 \cdot 10^{-10}$	$2.05 \cdot 10^{-7}$	$-1.55 \cdot 10^{-3}$
$\Theta_{\nu,m,n}(x)$	$-4.20 \cdot 10^{-18}$	$-1.45 \cdot 10^{-17}$	$-1.45 \cdot 10^{-17}$

の場合に対して、 $\nu$  を  $1/2$  に近づけていく場合の結果を示す。 $\nu = 1/2$  のときに、近似式の精度が高いことは前述の理由による。

表2には、 $\nu = 0.2$ ,  $n = 0$ ,  $m = 10$  の場合に対して、 $x$  が  $\pi/2$  に近いときの結果を示す。式(32)からも分かるように、 $|\cos x| \ll 1$  のときには、本方法の近似式の精度は低くなる。このことは、本方法IIの欠点であり、この場合には、方法IIIあるいは方法Iを代わりに用いることが必要となる。

### 3. 方法IIIの誤差解析

式(12)~(15)は、方法Iと同じである。式(15)と関係式(7)より

$$\sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} \left( \frac{F_{\nu+2k+1}(x)}{\xi} + \frac{J_{\nu+m+1}(x)Y_{\nu+2k+1}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} \right)$$

$$+ \sum_{k=m/2+1}^{\infty} \varepsilon_k^{(2)} J_{\nu+2k+1}(x) = \sin x \quad (33)$$

が得られる。式(15)と(33)から  $\xi$  を消去し、 $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  を

$$\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x) = \frac{1}{\sin x} \left( \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} \frac{J_{\nu+m+1}(x)Y_{\nu+2k+1}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} + \sum_{k=m/2+1}^{\infty} \varepsilon_k^{(3)} J_{\nu+2k+1}(x) \right) \quad (34)$$

と定義すると、次式が得られる。

$$J_{\nu+n}(x) = \frac{\sin x F_{\nu+n}(x)}{\sum_{k=0}^m \varepsilon_k^{(3)} F_{\nu+2k+1}(x)} (1 - \Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)) + \frac{J_{\nu+m+1}(x)Y_{\nu+n}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} \quad (35)$$

さらに、式 (19) を用いれば、

$$J_{\nu+n}(x) = \frac{\sin x F_{\nu+n}(x)}{\sum_{k=0}^m \varepsilon_k^{(3)} F_{\nu+2k+1}(x)} (1 - \Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)) + J_{\nu+n}(x) \Theta_{\nu,m,n}(x) \tag{35'}$$

と表すこともできる。

したがって、式 (1) を出発値として、漸化式 (2) を繰り返し適用することより得られた  $F_{\nu+m-1}(x)$ ,  $F_{\nu+m-2}(x)$ ,  $\dots$ ,  $F_\nu(x)$  を用いて、式 (9) により、10 進  $p$  桁の精度で  $J_{\nu+n}(x)$  が計算できるためには、方法 II と同様に、

$$|\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)| < 0.5 \times 10^{-p} \tag{36}$$

および式 (21) が成り立てばよい。

$J_{\nu+n}(x)$  の近似式 (9) の相対誤差  $E_{\nu,m,n}^{(3)}(x)$  については、式 (22) と (23) と同様のものが成り立つ。

### 3.1 $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$ の変形

式 (34) で表される  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  を変形しよう。式 (7) を用いれば、次式が得られる。

$$\begin{aligned} \Phi_{\nu,m}^{(3)}(x) &= \frac{1}{\sin x} \left( \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} \frac{J_{\nu+m+1}(x) Y_{\nu+2k+1}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} + \sin x - \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} J_{\nu+2k+1}(x) \right) \\ &= \frac{\sin x Y_{\nu+m+1}(x) + \frac{2}{\pi x} \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} R_{m-2k-1, \nu+2k+2}(x)}{\sin x Y_{\nu+m+1}(x)} \end{aligned} \tag{37}$$

上式の分子の第 1 項を書き換えよう。次式で表される  $\sin x J_\nu(x)$  のベキ級数展開 (付録 B 参照)

$$\sin x J_\nu(x) = \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k+1} \frac{\Gamma(\nu+2k+3/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(\nu+k+1) \Gamma(\nu+k+3/2)} \tag{38}$$

を用いて変形すると、

$$\begin{aligned} \sin x Y_{\nu+m+1}(x) &= (\sin x J_{\nu+m+1}(x) \cos(\nu+m+1)\pi - \sin x J_{-\nu-m-1}(x)) / \sin(\nu+m+1)\pi \\ &= \left\{ \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1)\pi \left(\frac{x}{2}\right)^{\nu+m+1} \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^k (x/2)^{2k+1} \Gamma(\nu+m+k+5/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(\nu+m+k+2) \Gamma(\nu+m+k+5/2)} \right. \\ &\quad \left. - \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m-1} \right\} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} &\left. \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^k (x/2)^{2k+1} \Gamma(-\nu-m+2k+1/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(-\nu-m+k) \Gamma(-\nu-m+k+1/2)} \right\} \\ &\quad / \sin(\nu+m+1)\pi \\ &= \left\{ \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1) \left(\frac{x}{2}\right)^{\nu+m+1} \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^k (x/2)^{2k+1} \Gamma(\nu+m+2k+5/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(\nu+m+k+2) \Gamma(\nu+m+k+5/2)} \right. \\ &\quad \left. - \left[ \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m-1} \sum_{k=0}^m \frac{(-1)^k (x/2)^{2k+1} \Gamma(-\nu-m+2k+1/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(-\nu-m+k) \Gamma(-\nu-m+k+1/2)} \right. \right. \\ &\quad \left. \left. + \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m-1} \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^{m+k+1} (x/2)^{2m+k+3} \Gamma(-\nu+m+2k+5/2) \right) \right. \right. \\ &\quad \left. \left. / \left( (m+k+1)! \Gamma(m+k+5/2) \Gamma(-\nu+k+1) \cdot \Gamma(-\nu+k+3/2) \right) \right] \right\} \\ &\quad / \sin(\nu+m+1)\pi \\ &= \left\{ -\sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m-1} \sum_{k=0}^m \frac{(-1)^k (x/2)^{2k+1} \Gamma(-\nu-m+2k+1/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(-\nu-m+k) \Gamma(-\nu-m+k+1/2)} \right. \\ &\quad \left. + \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1) \left(\frac{x}{2}\right)^{\nu+m+1} \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^k (x/2)^{2k+1} \Gamma(\nu+m+2k+5/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(\nu+m+k+2) \Gamma(\nu+m+k+5/2)} \right. \\ &\quad \left. - \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m-1} \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^{m+k+1} (x/2)^{2m+k+3} \Gamma(-\nu+m+2k+5/2) \right) \right. \\ &\quad \left. / \left( (m+k+1)! \Gamma(m+k+5/2) \Gamma(-\nu+k+1) \cdot \Gamma(-\nu+k+3/2) \right) \right\} \\ &\quad / \sin(\nu+m+1)\pi \\ &= -\frac{1}{\sqrt{\pi}} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m} \sum_{k=0}^m \frac{(-1)^k (x/2)^{2k} \Gamma(\nu+m-k+1) \Gamma(\nu+m-k+1/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(\nu+m-2k+1/2)} \\ &\quad + \left\{ \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1)\pi \left(\frac{x}{2}\right)^{\nu+m+1} \right\} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \frac{(-1)^k (x/2)^{2k+1} \Gamma(\nu + m + 2k + 5/2)}{k! \Gamma(k + 3/2) \Gamma(\nu + m + k + 2) \Gamma(\nu + m + k + 5/2)} \\ & - \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu+m+1} \\ & \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^{m+k+1} (x/2)^{2k+1} \Gamma(-\nu + m + 2k + 5/2) \right) \\ & \left. \begin{aligned} & / \left( (m+k+1)! \Gamma(m+k+5/2) \Gamma(-\nu+k+1) \right. \\ & \left. \cdot \Gamma(-\nu+k+3/2) \right) \} \end{aligned} \right. \end{aligned}$$

$$\left. \begin{aligned} & / \sin(\nu + m + 1)\pi \end{aligned} \right. \quad (39)$$

上式において、最後の式の第1の部分の変形において、ガンマ関数の反転公式を用いた。

式(37)の右辺の分子の第2項は、次のように書き換えられる。

$$\begin{aligned} & \frac{2}{\pi x} \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} R_{m-2k-1, \nu+2k+2}(x) \\ & = \frac{1}{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-m} \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} \left(\frac{x}{2}\right)^{2k} \\ & \cdot \sum_{l=0}^{m/2-k-1} \left(\frac{x}{2}\right)^{2l} \frac{(-1)^l (m-2k-l-1)! \Gamma(\nu+m-l+1)}{l! (m-2k-2l-1)! \Gamma(\nu+2k+l+2)} \\ & = \frac{1}{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-m} \sum_{j=0}^{m/2-1} \sum_{l=0}^j \varepsilon_{j-l}^{(3)} \left(\frac{x}{2}\right)^{2j} \\ & \cdot \frac{(-1)^l (m+l-2j-1)! \Gamma(\nu+m-l+1)}{l! (m-2j-1)! \Gamma(\nu-l+2j+2)} \\ & = \frac{1}{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m} \frac{2\Gamma(\nu+1)}{\Gamma(2\nu+1)} \sum_{j=0}^{m/2-1} \left(\frac{x}{2}\right)^j \frac{(-1)^j}{(m-2j-1)!} \\ & \cdot \sum_{l=0}^j \left( (\nu+2j-2l+1) \Gamma(2\nu+2j-2l+1) \right. \\ & \quad \cdot (m+l-2j-1)! \Gamma(\nu+m-l+1) \\ & \quad \left. / \left( l! \Gamma(2j-2l+2) \Gamma(\nu-l+2j+2) \right) \right) \\ & = \frac{1}{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m} \frac{2\Gamma(\nu+1)}{\Gamma(2\nu+1)} \sum_{j=0}^{m/2-1} \left(\frac{x}{2}\right)^j \frac{(-1)^j}{(m-2j-1)!} \\ & \cdot \sum_{l=0}^{\infty} \left( (\nu+2j-2l+1) \Gamma(2\nu+2j-2l+1) \right. \\ & \quad \cdot (m+l-2j-1)! \Gamma(\nu+m-l+1) \\ & \quad \left. / \left( l! \Gamma(2j-2l+2) \Gamma(\nu-l+2j+2) \right) \right) \\ & = \frac{1}{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m} \frac{2\Gamma(\nu+1)}{\Gamma(2\nu+1)} \sum_{j=0}^{m/2-1} \left(\frac{x}{2}\right)^j \frac{(-1)^j}{(m-2j-1)!} \\ & \cdot \frac{(\nu+2j+1)(m-2j-1)! \Gamma(\nu+m+1) \Gamma(2\nu+2j+1)}{(2j+1)! \Gamma(\nu+2j+2)} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} & \cdot \sum_{l=0}^{\infty} \left( (-j-1/2)_l (m-2j)_l (-\nu-2j-1)_l \right. \\ & \quad \cdot (-\nu/2-j+1/2)_l (-j)_l \\ & \quad / \left( l! (-\nu-j)_l (-\nu-j+1/2)_l \right. \\ & \quad \left. \cdot (-\nu-m)_l (-\nu/2-j-1/2)_l \right) \end{aligned} \quad (40)$$

ここで、定理(29)を用いれば、次式が得られる。

$$\begin{aligned} & \frac{2}{\pi x} \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(3)} R_{m-2k-1, \nu+2k+2}(x) \\ & = \frac{1}{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m} \frac{2\Gamma(\nu+1)}{\Gamma(2\nu+1)} \sum_{j=0}^{m/2-1} \left(\frac{x}{2}\right)^j \frac{(-1)^j}{(m-2j-1)!} \\ & \cdot \frac{(\nu+2j+1)(m-2j-1)! \Gamma(\nu+m+1) \Gamma(2\nu+2j+1)}{(2j+1)! \Gamma(\nu+2j+2)} \\ & \cdot \frac{(-\nu-2j)_j (-\nu-m+j+1/2)_j}{(-\nu-j+1/2)_j (-\nu-m)_j} \\ & = \frac{1}{\sqrt{\pi}} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m} \sum_{j=0}^{m/2-1} \left(\frac{x}{2}\right)^{2j} \\ & \cdot \frac{\Gamma(\nu+m-j+1) \Gamma(-\nu-m+2j+1/2)}{j! \Gamma(j+3/2) \Gamma(-\nu-m+j+1/2)} \\ & = \frac{1}{\sqrt{\pi}} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m} \sum_{j=0}^{m/2-1} \left(\frac{x}{2}\right)^{2j} \\ & \cdot \frac{(-1)^j \Gamma(\nu+m-j+1) \Gamma(\nu+m-j+1/2)}{j! \Gamma(j+3/2) \Gamma(\nu+m-2j+1/2)} \end{aligned} \quad (41)$$

式(39)と(41)を式(37)の右辺に代入すると、方法IIの場合と同様に、その分子において、第1の部分のベキ級数展開の一部と第2の部分 ( $k=0, 1, \dots, m/2-1$ の項) が相殺し、次式を得る。

$$\begin{aligned} & \Phi_{\nu, m}^{(3)}(x) \\ & = \left[ \frac{-1}{\sqrt{\pi}} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu-m} \right. \\ & \quad \cdot \sum_{k=m/2}^m \left( (-1)^k (x/2)^{2k} \Gamma(\nu+m-k+1) \right. \\ & \quad \cdot \Gamma(\nu+m-k+1/2) \\ & \quad \left. / \left( k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(\nu+m-2k+1/2) \right) \right. \\ & \quad \left. + \left\{ \sqrt{\pi} \cos(\nu+m+1)\pi \left(\frac{x}{2}\right)^{\nu+m+1} \right. \right. \\ & \quad \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^k (x/2)^{2k+1} \Gamma(\nu+m+2k+5/2) \right) \\ & \quad \left. / \left( k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(\nu+m+k+2) \right. \right. \\ & \quad \left. \left. \cdot \Gamma(\nu+m+k+5/2) \right) \right. \\ & \quad \left. - \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu+m+1} \right. \\ & \quad \left. \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \left( (-1)^{m+k+1} (x/2)^{2k+1} \Gamma(-\nu+m+2k+5/2) \right) \right. \end{aligned}$$



表3  $x = 10$  の場合の  $J_{\nu+n}(x)$  の近似式 (9) の相対誤差,  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  および  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$   
 Table 3 Relative error of approximation (9) to  $J_{\nu+n}(x)$ ,  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  and  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$   
 in the case of  $x = 10$ .

	(a) $\nu = 0.2$ $n = 0$ $m = 20$	(b) $\nu = 0.2$ $n = 16$ $m = 20$	(c) $\nu = 0.8$ $n = 0$ $m = 20$
Approximation (9)	$-2.16969009496 \cdot 10^{-1}$	$1.25673822586 \cdot 10^{-3}$	$-3.10826114420 \cdot 10^{-2}$
Relative error of (9)	$-1.81 \cdot 10^{-5}$	$-2.26 \cdot 10^{-5}$	$-7.57 \cdot 10^{-5}$
$\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$	$-1.81 \cdot 10^{-5}$	$-1.81 \cdot 10^{-5}$	$-7.57 \cdot 10^{-5}$
Estimate (43) of $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$	$-1.81 \cdot 10^{-5}$	$-1.81 \cdot 10^{-5}$	$-7.57 \cdot 10^{-5}$
$\Theta_{\nu,m,n}(x)$	$1.67 \cdot 10^{-10}$	$4.48 \cdot 10^{-6}$	$4.25 \cdot 10^{-10}$

表4  $x \approx \pi$  の場合の  $J_{\nu+n}(x)$  の近似式 (9) の相対誤差,  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  および  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$   
 Table 4 Relative error of approximation (9) to  $J_{\nu+n}(x)$ ,  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  and  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$   
 in the case of  $x \approx \pi$ .

	(a) $x = 3.1$ $\nu = 0.2$ $n = 0$ $m = 16$	(b) $x = 3.141$ $\nu = 0.2$ $n = 0$ $m = 16$	(c) $x = 3.1415927$ $\nu = 0.2$ $n = 0$ $m = 16$
Approximation (9)	$-1.74469955370 \cdot 10^{-1}$	$-1.90296967671 \cdot 10^{-1}$	$-1.90444250769 \cdot 10^{-1}$
Relative error of (9)	$3.65 \cdot 10^{-10}$	$3.19 \cdot 10^{-8}$	$-4.08 \cdot 10^{-4}$
$\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$	$3.65 \cdot 10^{-10}$	$3.19 \cdot 10^{-8}$	$-4.08 \cdot 10^{-4}$
Estimate (43) of $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$	$3.65 \cdot 10^{-10}$	$3.19 \cdot 10^{-8}$	$-4.08 \cdot 10^{-4}$
$\Theta_{\nu,m,n}(x)$	$8.60 \cdot 10^{-22}$	$1.20 \cdot 10^{-21}$	$1.21 \cdot 10^{-21}$

$$\left. \begin{aligned} & / \left\{ (m+k+1)! \Gamma(m+k+5/2) \Gamma(-\nu+k+1) \right. \\ & \left. \cdot \Gamma(-\nu+k+3/2) \right\} \\ & / \left[ \sin(\nu+m+1)\pi \right] / \left[ \sin x Y_{\nu+m+1}(x) \right] \quad (42) \end{aligned}$$

上式において,  $(\nu+m/2) \cdot m/2 \gg x/2$  ならば, [] の第1の部分の  $k = m/2$  の項が主要項である. したがって,  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  に対する有用な評価式として, 次式が得られる.

$$\begin{aligned} & \Phi_{\nu,m}^{(3)}(x) \\ & \approx \frac{(-1)^{m/2+1} \Gamma(\nu+m/2+1) \Gamma(\nu+m/2+1/2) (x/2)^{-\nu}}{\sqrt{\pi} \sin x Y_{\nu+m+1}(x) (m/2)! \Gamma(m/2+3/2) \Gamma(\nu+1/2)} \\ & = \frac{2(-1)^{m/2+1} \Gamma(2\nu+m+1)}{\sqrt{\pi} \sin x Y_{\nu+m+1}(x) (m+1)! \Gamma(\nu+1/2)} (2x)^{-\nu} \quad (43) \end{aligned}$$

3.2 方法 III による  $J_{\nu+n}(x)$  の計算について

方法 II と同様にして,  $J_{\nu+n}(x)$  を計算することができる.

表3の(a), (b), (c)には,  $J_{\nu+n}(x)$  の近似式(9)の値, その相対誤差,  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  の値(式(34)の計算値), その評価式(43)の値および  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$  の値の数値例として,  $x = 10$  で, 表中に記した  $\nu, n, m$  の場合の結果を示す. 式(43)が  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  の十分な評価式になっていることが分かる.  $n = 0$  の場合には,  $\Theta_{\nu,m,n}(x)$

は  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  に比べて十分に小さいことが分かる. また(b)の場合は, 式(9)の相対誤差は,  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  ではなく,  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x) - \Theta_{\nu,m,n}(x)$  で評価しなければならないことが分かる. 紙面の都合上, この一例しか示すことができないが, 他の場合の結果もほぼ同様である.

表4には,  $\nu = 0.2, n = 0, m = 16$  の場合に対して,  $x$  が  $\pi$  に近いときの結果を示す. 式(43)からも分かるように,  $|\sin x| \ll 1$  のときには, 本方法の近似式の精度は低くなる. このことは, 本方法 III の欠点であり, この場合には, 方法 II あるいは方法 I を代わりに用いることが必要となる.

4. 方法 I, II, III の比較

方法 I の場合には, 文献2)から,

$$\begin{aligned} J_{\nu+n}(x) = & \frac{F_{\nu+n}(x)}{m/2} (1 - \Phi_{\nu,m}^{(1)}(x)) \\ & \sum_{k=0}^{m/2} \varepsilon_k^{(1)} F_{\nu+2k}(x) \\ & + \frac{J_{\nu+m+1}(x) Y_{\nu+n}(x)}{Y_{\nu+m+1}(x)} \quad (44) \end{aligned}$$

であり,  $\nu + m/2 \gg x/2$  のとき,

表5  $\nu = 0.2, m = 30$  の場合の  $\Phi_{\nu,m}^{(1)}(x), \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  および  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$

Table 5  $\Phi_{\nu,m}^{(1)}(x), \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  and  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  in the case of  $\nu = 0.2$  and  $m = 30$ .

$x$	$\Phi_{\nu,m}^{(1)}(x)$	$\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$	$\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$
10	$1.36 \cdot 10^{-13}$	$7.38 \cdot 10^{-15}$	$1.85 \cdot 10^{-12}$
11	$2.40 \cdot 10^{-12}$	$-2.47 \cdot 10^{-11}$	$1.61 \cdot 10^{-11}$
12	$3.19 \cdot 10^{-11}$	$-1.72 \cdot 10^{-12}$	$3.65 \cdot 10^{-10}$
13	$3.33 \cdot 10^{-10}$	$-1.67 \cdot 10^{-11}$	$-4.49 \cdot 10^{-9}$
14	$2.81 \cdot 10^{-9}$	$-9.36 \cdot 10^{-10}$	$-1.50 \cdot 10^{-8}$
15	$1.98 \cdot 10^{-8}$	$1.19 \cdot 10^{-9}$	$-1.50 \cdot 10^{-7}$
16	$1.18 \cdot 10^{-7}$	$5.62 \cdot 10^{-9}$	$1.89 \cdot 10^{-6}$
17	$6.11 \cdot 10^{-7}$	$1.01 \cdot 10^{-7}$	$2.76 \cdot 10^{-6}$
18	$2.76 \cdot 10^{-6}$	$-1.90 \cdot 10^{-7}$	$1.51 \cdot 10^{-5}$
19	$1.10 \cdot 10^{-5}$	$-5.08 \cdot 10^{-7}$	$-2.86 \cdot 10^{-4}$
20	$3.94 \cdot 10^{-5}$	$-4.39 \cdot 10^{-6}$	$-1.59 \cdot 10^{-4}$

表6  $\nu = 0.8, m = 30$  の場合の  $\Phi_{\nu,m}^{(1)}(x), \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  および  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$

Table 6  $\Phi_{\nu,m}^{(1)}(x), \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  and  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  in the case of  $\nu = 0.8$  and  $m = 30$ .

$x$	$\Phi_{\nu,m}^{(1)}(x)$	$\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$	$\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$
10	$8.96 \cdot 10^{-14}$	$-3.64 \cdot 10^{-14}$	$9.46 \cdot 10^{-12}$
11	$1.59 \cdot 10^{-12}$	$1.22 \cdot 10^{-10}$	$8.28 \cdot 10^{-11}$
12	$2.12 \cdot 10^{-11}$	$8.54 \cdot 10^{-12}$	$1.89 \cdot 10^{-9}$
13	$2.22 \cdot 10^{-10}$	$8.32 \cdot 10^{-11}$	$-2.33 \cdot 10^{-8}$
14	$1.88 \cdot 10^{-9}$	$4.69 \cdot 10^{-9}$	$-7.80 \cdot 10^{-8}$
15	$1.33 \cdot 10^{-8}$	$-5.98 \cdot 10^{-9}$	$-7.85 \cdot 10^{-7}$
16	$8.02 \cdot 10^{-8}$	$-2.85 \cdot 10^{-8}$	$1.00 \cdot 10^{-5}$
17	$4.17 \cdot 10^{-7}$	$-5.16 \cdot 10^{-7}$	$1.46 \cdot 10^{-5}$
18	$1.90 \cdot 10^{-6}$	$9.80 \cdot 10^{-7}$	$8.06 \cdot 10^{-5}$
19	$7.66 \cdot 10^{-6}$	$2.64 \cdot 10^{-6}$	$-1.54 \cdot 10^{-3}$
20	$2.76 \cdot 10^{-5}$	$2.30 \cdot 10^{-5}$	$-8.68 \cdot 10^{-4}$

$$\Phi_{\nu,m}^{(1)}(x) \approx \frac{-\Gamma(\nu + m/2)}{\pi Y_{\nu+m+1}(x)(m/2 + 1)!} \left(\frac{x}{2}\right)^{-\nu+1} \quad (45)$$

となることが分かる。

表5には、 $\nu = 0.2, m = 30$  の場合に対して、 $x = 10, 11, 12, \dots, 20$  のように変えたときの  $\Phi_{\nu,m}^{(1)}(x), \Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  および  $\Phi_{\nu,m}^{(3)}(x)$  の評価式の値を示す。表6には、 $\nu$  を  $\nu = 0.8$  とした場合について、表5と同様の結果を示す。これらの表から、 $|\cos x|$  が非常に小さくなる  $x = 11$  の場合 ( $\pi/2 \cdot 7 = 10.9955\dots$ ) を除いて、 $\Phi_{\nu,m}^{(2)}(x)$  の評価式の値が最も小さいことが分かる。紙面の都合で、この2つの例しか示すことはできないが、他の場合もほぼ同様な結果が得られる。

### 5. おわりに

本論文では、方法IIおよび方法III、すなわち、式(8)および(9)による  $J_\nu(x)$  の数値計算法の誤差解析を行った。これにより、次のような有用な知見を得ることができた。

方法IIは、同じ値の  $m$  (漸化式(2)の繰り返し回数) に対して、 $|\cos x| \ll 1$  でないときには、方法I (従来からの通常の方法)、方法IIIと比べて精度が高く、また、方法IIは、 $\nu \cong 1/2$  のとき、 $\nu$  の他の値の場合と比べて精度が高くなるという特長をもっている。その反面、方法IIは、方法Iと比べて、 $|\cos x| \ll 1$  のときには精度が低く、また、 $\cos x$  の計算を実際に必要とするという短所を持っている。

なお、本論文では扱わないが、 $x$  の複素数への拡張は、方法Iについては、実軸に近いところを除いて、式(4)の分母の和で桁落ちが生ずるので可能ではないが、方法IIおよび方法IIIについては可能である。方法IIおよび方法IIIは複素数への拡張の面で長所を持っているといえる。

### 参考文献

- 1) 二宮市三：漸化式による Bessel 関数の計算，電子計算機のための数値計算法II，pp.103-121，培風館，東京(1965)。
- 2) 吉田年雄：漸化式を用いるベッセル関数の積分  $\int_0^x J_\nu(t)dt$  の数値計算法の誤差解析，情報処理学会論文誌，Vol.35, No.5, pp.917-925 (1994)。
- 3) Watson, G.N.: *A Treatise on the Theory of Bessel Functions*, second edition, p.369, Cambridge University Press (1966)。
- 4) 森口繁一，宇田川銈久，一松 信：数学公式III，p.225，岩波書店，東京(1968)。
- 5) 吉田年雄：一般化された超幾何級数の和の定理の応用，情報科学リサーチジャーナル，中部大学情報科学研究所，Vol.2, pp.57-60 (1995)。
- 6) Slater, L.J.: *Generalized Hypergeometric Functions*, p.56, Cambridge University Press (1966)。
- 7) 大井鉄郎：特殊関数，p.165，岩波書店，東京(1976)。

### 付録 A

$$\begin{aligned} \cos x J_\nu(x) &= \sum_{l=0}^{\infty} \frac{(-1)^l x^{2l}}{(2l)!} \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{j=0}^{\infty} \frac{(-1)^j (x/2)^{2j}}{j! \Gamma(\nu + j + 1)} \\ &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} \sum_{l=0}^k \frac{(-1)^l x^{2l} (-1)^{k-l} (x/2)^{2k-2l}}{(2l)!(k-l)! \Gamma(\nu + k - l + 1)} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k} \\
 &\quad \cdot \sum_{l=0}^k \frac{2^{2l}}{(2l)! \Gamma(k-l+1) \Gamma(\nu+k-l+1)} \\
 &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k} \\
 &\quad \cdot \sum_{l=0}^{\infty} \frac{2^{2l}}{(2l)! \Gamma(k-l+1) \Gamma(\nu+k-l+1)} \\
 &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k} \frac{1}{k! \Gamma(\nu+k+1)} \\
 &\quad \cdot \sum_{l=0}^{\infty} \frac{(-k)_l (-\nu-k)_l}{l! (1/2)_l}
 \end{aligned} \tag{A-1}$$

Gauss の公式<sup>7)</sup>

$${}_2F_1(a, b; c; 1) = \frac{\Gamma(c) \Gamma(c-a-b)}{\Gamma(c-a) \Gamma(c-b)} \tag{A-2}$$

を用いると次式を得る。

$$\begin{aligned}
 \cos x J_\nu(x) &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k} \\
 &\quad \cdot \frac{1}{k! \Gamma(\nu+k+1)} \frac{\Gamma(\nu+2k+1/2) \Gamma(1/2)}{\Gamma(\nu+k+1/2) \Gamma(k+1/2)} \\
 &= \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k} \\
 &\quad \cdot \frac{\Gamma(\nu+2k+1/2)}{k! \Gamma(k+1/2) \Gamma(\nu+k+1) \Gamma(\nu+k+1/2)}
 \end{aligned} \tag{A-3}$$

付 録 B

$$\begin{aligned}
 \sin x J_\nu(x) &= \sum_{l=0}^{\infty} \frac{(-1)^l x^{2l+1}}{(2l+1)!} \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{j=0}^{\infty} \frac{(-1)^j (x/2)^{2j}}{j! \Gamma(\nu+j+1)} \\
 &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \\
 &\quad \cdot \sum_{k=0}^{\infty} \sum_{l=0}^k \frac{(-1)^l x^{2l+1} (-1)^{k-l} (x/2)^{2k-2l}}{(2l+1)! (k-l)! \Gamma(\nu+k-l+1)} \\
 &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k+1}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 &\cdot \sum_{l=0}^k \frac{2^{2l+1}}{(2l+1)! \Gamma(k-l+1) \Gamma(\nu+k-l+1)} \\
 &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k+1} \\
 &\quad \cdot \sum_{l=0}^{\infty} \frac{2^{2l+1}}{(2l+1)! \Gamma(k-l+1) \Gamma(\nu+k-l+1)} \\
 &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k+1} \\
 &\quad \cdot \frac{2}{k! \Gamma(\nu+k+1)} \sum_{l=0}^k \frac{(-k)_l (-\nu-k)_l}{l! (3/2)_l} \\
 &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k+1} \\
 &\quad \cdot \frac{2}{k! \Gamma(\nu+k+1)} \sum_{l=0}^{\infty} \frac{(-k)_l (-\nu-k)_l}{l! (1/2)_l}
 \end{aligned} \tag{A-4}$$

Gauss の公式 (A-2) を用いると次式を得る。

$$\begin{aligned}
 \sin x J_\nu(x) &= \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k+1} \frac{2}{k! \Gamma(\nu+k+1)} \\
 &\quad \cdot \frac{\Gamma(\nu+2k+3/2) \Gamma(3/2)}{\Gamma(\nu+k+3/2) \Gamma(l+3/2)} \\
 &= \sqrt{\pi} \left(\frac{x}{2}\right)^\nu \sum_{k=0}^{\infty} (-1)^k \left(\frac{x}{2}\right)^{2k+1} \\
 &\quad \cdot \frac{\Gamma(\nu+2k+3/2)}{k! \Gamma(k+3/2) \Gamma(\nu+k+1) \Gamma(\nu+k+3/2)}
 \end{aligned} \tag{A-5}$$

(平成 8 年 12 月 2 日受付)

(平成 9 年 3 月 7 日採録)



吉田 年雄 (正会員)

昭和 19 年名古屋市生。昭和 43 年慶応義塾大学工学部電気工学科卒業。昭和 45 年名古屋大学大学院工学研究科修士課程 (電子工学専攻) 修了。昭和 48 年同博士課程満了。同年名古屋大学工学部助手。昭和 60 年同講師。昭和 61 年中部大学工学部助教授。昭和 63 年同経営情報学部配置換。平成 2 年教授。数値解析の研究に従事。特殊関数、とくにベッセル関数の数値計算法の研究、開発に興味を持っている。工学博士。電子情報通信学会、日本応用数理学会会員。